

大学院修了にあたって(編集後記にかえて)

5年前の春、卒業研究を行うため教育学研究室の門を叩いた。

数多くの研究室の中から教育学研究室を選択した理由は、橋本教授の人柄や授業の楽しさ、そして研究室の和気あいあいとした雰囲気が魅力的であったからである。

我が研究室は、橋本教授、田代助手を筆頭に、院生 6 名、卒研生 10 数名が所属しており、学年毎に行われるゼミ活動を通じて研究の手法や問題意識に対する多角的な助言を得る機会が提供されている。

特に、院生は週 1 回のペースで調査の手法を習得することや翻訳活動を行うために院ゼミ及び、年に 2 回の缶詰状態の合宿を開催している。

合宿は、研究の Plan→Do→See を行うこと、そしてメンバーの親睦を図る良い機会となっている。メンバーはお風呂とトイレ、わずかな休憩時間以外は研究に対する討論で徹をとばす。このようにハードな合宿ではあるものの、参加しているメンバー全員が密かに楽しみにしていることがある。それは……宴会(地酒、地ビール、地の肴をゲット)である。

教育学研究室に所属すると下戸であった者も酒の旨さを知り、愛飲家へと変身する。それは、メンバーの旨い酒、旨い肴を得るための努力は惜しまないという姿勢が反映されているものと思われる。

教育学研究室は、「よく飲み、よく食べ、よく笑い、よく学ぶ」というキャッチフレーズがぴったりの、楽しさ&厳しさ溢れる研究室であった。(修士 2 年 三浦麻矢)

助産婦として働いていた私が、自分の無能さに気付かされ、「こんな私が仕事をしていたのだ」と自己嫌悪の院生生活。

この春、三浦、森政、小林の 3 名は、社会人生活を再スタートする。今後も、どんな状況においても、抱いた疑問に正面から向かう、そんな姿勢を忘れずにいたいと思う。

研究室には、修士の時からテーマを発展させるべく研究を続ける藤野、松井、これまで研究室にはなかった新しい問題意識とテーマを持った河内という学生がいる。看護婦、栄養士、助産婦というそれぞれの経験をもつ彼女たちによって、本研究室も更なる発展を遂げることだろう。私も、いつでも彼女たちの研究に助言できるような、期待される先輩

でいられるよう、これからも頑張りたいと思う。

本研究室は、人間としても、研究者としても、成長を促される環境である。私見を率直に述べることができ、それを受け止めてくれたり、はね返してくれる師と仲間は宝である。

自分のいた世界を斜めに見ていたこの5年間…。例えばジェンダーの視点等、これまで学んできたことを、この後、私はどう伝えていけば良いのだろう…。

本当にお世話になりました。今がスタートです。まだまだ勉強しなくてはなりません。また寄せて頂きます。(博士3年 小林由美)

研究室紀要も、早いものでもう3冊目です。今回の編集活動の中心は、博士2年の2名です。この2名は本紀要掲載論文の執筆、ゼミ報告原稿、編集のすべてに中心的に関わりました。創刊号の時の橋本先生、田代助手に多くを任せた状況から比べれば進歩だと思います。

研究室紀要は、研究経過、研究成果の発表の場として、あるいはゼミ等で皆で熱烈に討議し形成した問題視角、方法論などの再確認の場として位置付けられ、それぞれに要求される水準が定まってきたように思います。

しかし、研究室紀要を刊行することで何より貴重なのは、締め切りを気にしながら、自分の研究を見つめ直し、まとめ、他の院生の情け容赦ない、しかし学問的本質をついた批評を受け、何度も書き直し、時には混乱し、その中で自分の研究の意義を再確認していくという一連の経過です。私自身は筆が遅く、多くの人に迷惑をかける立場でしたが、この経過で培われた、課題意識、理論的枠組み、表現方法などはD論をまとめる時に自分の中で骨となり、肉となっていることを改めて感じました。

これは、「よりよい研究を」という学生の熱意に基づいた、自由闊達な議論ができる院生集団があるからこそ実現されることです。この集団の形成のため経歴、研究歴が多様な学生を受け入れ、膨大なエネルギーを割いてくださった橋本先生の御指導に感謝するとともに、自分がそこに属することを幸せに思います。(博士3年 森政淳子)